

水稲の病害虫対策

◎トビイロウンカ

9月頃になると急増し、坪枯れが発生します。昨年も被害がありました。

トビイロウンカは株元で成育します。田の中央部の発生状況を十分注意し、防除を行う際は薬剤が株元まで届くように散布しましょう。



◎斑点米カメムシ類

吸汁加害により品質低下を引き起こします。主に畦畔、雑草地に生息しているので、草刈りを行うことによって被害を抑えることができます。草刈りは、**出穂期の10日前まで**に行いましょう。それ以降に行うとカメムシが水田に逃げ込み、被害を助長させてしまいます。薬剤による防除は**穂揃い期とその7～10日後の2回**行いましょう。

ウンカ類、カメムシ類の防除薬剤

薬剤	希釈倍率	10aあたりの散布量 (使用量)	使用時期
キラップフロアブル	1,000～2000倍	100 L	収穫14日前まで
スタークル液剤10	1,000倍	60～150 L	収穫7日前まで
ダブルカットスタークル粉剤DL	—	3～4 kg	穂揃い期まで

※薬剤ごとに使用時期・使用量が異なるのでラベル等をよく読み使用しましょう。

◎穂いもちの防除

穂いもちの防除は「**穂ぼらみ期+穂揃い期(どちらも液剤又は粉剤)**」が効果的です。また、「にこまる」「ヒノヒカリ」は、いもち病に弱い品種なので特に注意が必要です。雨が続いて防除ができない場合でも、一時的な雨の合間を狙ってなるべく適期に防除を行う方が、天気が回復してから遅れて防除するより効果があります。適期防除を行えるよう、事前に準備を済ませておきましょう！

いもち病の防除薬剤

薬剤名	希釈倍率	10aあたり散布量 (使用量)	対象病害虫	使用時期
ブラシンバリダフロアブル	1,000倍	60～150L	いもち病、紋枯病、ごま葉枯病	収穫14日前まで
ビームアブロード スタークル粉剤5DL	—	3～4 kg	いもち病、ウンカ類、 カメムシ類、ツマグロヨコバイ	

※薬剤ごとに使用時期・使用量が異なるのでラベル等をよく読み使用しましょう。

大豆の病害虫対策



◎紫斑病とカメムシ類 ～基本は2回防除～

紫斑病とカメムシ類は**幼莢期と子実肥大期の2回**、同時に防除を行いましょう。

紫斑病の発生は品質低下を、カメムシ類の被害は収量と品質の低下、さらに青立ち株の発生を招きます。

幼莢期の大豆

薬剤名	希釈倍率	10aあたり散布液量	対象病害虫	使用時期
アミスター 20フロアブル	2,000～3,000倍	100～300L	紫斑病	収穫7日前まで
バルコート水和剤	1,000倍	150～300L		
スタークル液剤 10	1,000倍	100～300L	カメムシ	
キラップフロアブル	2,000倍			

※薬剤ごとに使用時期・使用量が異なるので、ラベル等をよく読み使用しましょう。

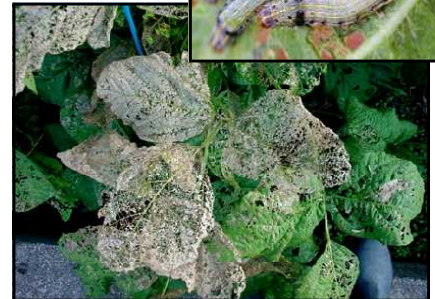


◎ハスモンヨトウ ～白い葉が防除の目印～

ハスモンヨトウは大きくなると防除効果が落ちるため若齢幼虫期の薬剤防除が重要です。

早期発見と地域での一斉防除で被害を最小限に抑えましょう。

薬剤防除は夕方に、葉の両面に散布しましょう!!



薬剤の特徴	薬剤名	希釈倍率	10aあたり散布量（使用量）	使用時期
脱皮阻害剤	ロムダン粉剤 DL	—	4kg	収穫 14 日前まで
長期残効剤	フェニックス顆粒水和剤	2,000倍	100～300L	収穫7日前まで
	プレバソンフロアブル5	4,000倍		

※薬剤ごとに使用時期・使用量が異なるので、ラベル等をよく読み使用しましょう。

農薬の適正使用を徹底しましょう!!

農薬の使用は農薬取締法、残留農薬は食品衛生法により規制されています。食品衛生法では、全ての農薬等について、**基準を超える残留農薬がある場合、販売等を禁止する**こととなっています。

農薬を使用する際はラベル等をよく読み、使用時期や使用量、使用回数を確認し、適切に使用しましょう。